

## 令和7年度 大学院短期招聘研究員の研究報告

招 聘 者：文学研究科 教授 大石泰夫

招聘研究員：李常清（齐鲁工业大学 副教授）

招 聘 期 間：令和7年7月1日（火）～令和7年7月31日（木）

### 学術交流報告（講演会等）①：

実施日時：7月11日（金）10：30～12：00

実施場所：0501演習室

タイトル：柳田国男の民俗芸術研究について

—雑誌『民俗芸術』と民俗芸術叢書を中心に—

参加対象：本学教員・大学院生・学部生

概 要：本講演では、まず中国における日本の民俗学と民俗芸術に関する研究史を回顧した。その結果、中国の研究者たちの日本民俗芸術に関する研究はまだ断片的で、十分に展開されておらず、また柳田国男と民俗芸術の関係は、民俗芸能史を回顧する中で簡略に触れられたのみで、概説的なまとめにとどまっていることが多いと気付いた。そのため、本講演では『民俗芸術』雑誌に掲載された8本の論文及び民俗芸術叢書第2巻の『民謡の今と昔』をもとに、柳田の民俗芸術観の特徴と、それに反映される学術思想を分析した。まず、柳田は、普通の人々が作った民俗芸術の価値を高く評価し、それが日本文化の根源を探る重要な手がかりであると考えた。また、柳田は民俗芸術の継承と伝播に注目し、変化する民俗芸術を分析し、その背後にある日本文化の変遷を明らかにしようと試みた。しかし、「民俗芸術」は次第に「民俗芸能」へと狭まり、その結果として研究対象の範囲も民俗芸能へと縮小していった。さらに、民俗芸能のショー化の傾向や芸能を継承する家元制度などは、民間伝承資料としての「民俗芸術（民俗芸能も含む）」の本来の性格を損なう結果を招き、柳田自身も次第に民俗芸術の会や機関誌の『民俗芸術』、さらには民俗芸能の研究から距離を置くようになった。

**学術交流報告（講演会等）②：**

実施日時：7月22日（火）14：30～16：00

実施場所：0502演習室

タイトル：長野地域における「鬼女紅葉」伝説についての一考察

参加対象：本学教員・大学院生・学部生

概要：本講演では、長野地域における「鬼女紅葉」伝説の書承伝説を四時期に分けて、在地伝承の過程を考察した。まず、「萌芽期」の作品群は、まだ整った伝説になっておらず、ただ都の伝説を戸隠山という舞台に移し、長野地域の伝説としての萌芽しか見せなかった。また、「準備期」の作品群は、鬼の後日談や村の名前の由来など、在地の民俗事象と関連させ、地方にある北向観音を祈願する観音として書き加えられ、在地との結びつきが「萌芽期」より、強調されるようになった。さらに、「成立期」の作品群になると、在地伝承は一層進化した。それは、主に鬼女に対する感情から窺える。それまで、「悪」扱いされていた紅葉は、地方の民衆の感情に応じて、「京都の文化を教える」善の一面を示すようになり、「善悪両面」の存在になる。さらに、「成熟・変転期」に入ると、パリエーションに富んだ再話は流行るようになった。「成立期」と同じく「善悪両面」としての造形があるほか、紅葉を完全の「善」の存在として描く作品も作り出された。さらに、紅葉と平維茂との悲恋を軸にし、伝説を展開させるような異色が漂っている作品も現れるようになった。このように、在地との結びつきが増えながら、現在まで伝承されてきたという結論を出した。

**学術交流報告（講演会等）③：**

実施日時：7月29日（火）14：10～15：10

実施場所：5号館3階5301教室

タイトル：中国における日本の民俗芸術研究について

参加対象：國學院大學伝承文化学会会員・一般・学生

概要：本講演では、まず、漢字表記の「民俗芸術」という用語を広義の意味において用いると説明しておいた。その次に、時間軸から中国における日本の民俗芸術研究についてまとめてみた。まず、20世紀前半、中国の留日学者たちは日本から民俗芸術の概念を導入したが、これに関して体系的な研究は行われなかった。日中戦争終了後、長い間、当時の特殊な時代背景の影響を受け、

日本民俗学や民俗芸術学を含む日本文化研究はほとんど進展しなかった。しかし、1970年代から1980年代にかけて、日中の国交正常化と国内の「文化ブーム」の余波の影響で、中国では目連劇や傩劇の研究ブームが高まった。一部の学者は、異国の世界から中国の古代劇の影響を探ろうとし、芸能、風流踊り、神楽など、傩劇に類似する日本の民俗芸能が中国の学者たちの視野に入った。さらに、1980年代末からの中日共同江南地域民俗調査は、中国民俗学のフィールドワークの転向や民俗誌の執筆方法に多くの示唆を与え、一部の研究者は中日学術交流の中で日本に赴き、関連する民俗芸能事象についてフィールドワークを行い、アジアにおける民俗芸術の比較研究を促進した。1990年代以降、中国民俗学は継続的に発展し、学問領域が広がり、分野が豊富になる中で、芸術と民俗の間での学際的な研究が生まれた。研究者たちは、芸術と民俗の関連した学術史を辿る際、日本の学者たちが行った試みを挙げているが、それは主に民俗芸術学の学問的起源を振り返るときに、日本が1920年代後半にこの分野を開拓した役割を指摘するものであり、日本の民俗芸術研究史に関する研究はさらに深める必要がある。21世紀に入ると、中国で無形文化遺産保護のブームが高まり、無形文化財の保護において早くから経験が豊富な日本は、中国にとって重要な参照対象となり、典型的な日本の地方事例や成熟した政策、法律が中国に紹介された。しかし、全体として見れば、日本の民俗芸術事象に関する研究は断片的であり、深い理論的な解釈が欠けている。中日学術交流の中で生まれた比較民俗学や比較民俗芸術学などの研究は、多くが表面的な類似性の研究にとどまり、成熟した方法論や理論を欠いている。また、近年、Vernacular Art への関心が高まるとともに、民俗芸能に関する研究も注目を浴びており、今後、さらに深い研究が期待される。